ウは宇宙船のウ
＝ブラッドベリSF傑作選＝

目次

解説『ウは宇宙船のウ』

評論家 中島 梓

レイ・ブラッドベリは私が最初に好きになったSF作家であり、いまでもいちばん好きな作家のひとりである。

『十月はたそがれの国』にはまったくいかれてしまった。『火星年代記』はいうまでもない。ブラッドベリの書いた、すばらしい、美しい、ふしぎな寂しさと静けさを湛えたたくさんの短編の中でも、ことに好きでたまらなかったものをあげると、『みずうみ』、『万華鏡』、『ロケット・マン』、『サルサの匂い』、『大鎌』、『世にも稀なる趣向の奇蹟』、『草原』、『ロケット』、『壜』、『小さな殺人者』、『風』、『ある老母の話』、『かくてリアブチンスカは死せり』——きりがない。『霧笛』も好きだし、『集会』や『四月の魔女』の系列のものも好きだった。

ことに夢中になったのは、しかし、『みずうみ』と『ロケット・マン』(私の読んだハヤカワの本では吉田誠一さんがそう訳していた。いまでも、萩尾望都さんが『宇宙船乗組員』にふられた、『スペースマン』という、よりモダンなことばでなく、『ロケット・マン』という、古風でゆたかなイメージのほうが、私にはぴったり来る感じがある)だった。恥をしのん

で白状してしまうと私は中学・高校時代にはせっせとマンガをかいては投稿していたが、怖いもの知らずにも、すっかりいかれていた『みずうみ』と『ロケット・マン』の二つを、何とかマンガ化しようとこころみたことさえもあるのである。この恐ろしいくわだては、私の救い難い絵音痴のために中絶したが、しかしそれが挫折してまことによかった。もし、うかうかと、何とかマンガ家の端くれにでもなっていたとしたら、私は結局、何とかしてブラッドベリのその美しい寂しい世界をマンガにしよう、という野心を捨てられずに持ちつづけ、その結果として、萩尾さんのこの「ブラッドベリ傑作劇場」を読んで愕然とし打ちのめされ再起不能、という有様になるのは確実だったからである。

しかも萩尾さんの選択には、私があれほど「これはどうしてもマンガにしなければ」と思いつづけていた『みずうみ』も『ロケット・マン』も、『霧笛』まで、すべて入っているのだ。有難いことに私はマンガ家になりそこねた。そのおかげで、私は、萩尾さんの選択にショックをうけるかわりに、「ああ、モーさまも同じ作品を好きなのだ」と、ひとりで悦にいってニタニタしていられる。

それに、ブラッドベリをマンガ化するのが萩尾さんだということ、萩尾

さんが選んだのがほかならぬブラッドベリであったということ、これは、まことによいことである。おかげで私たちは、私のとんでもない絵でも、他の誰かれの絵でもなく、ブラッドベリをやるならなるほど彼女しかいなかっただろうという、萩尾さんの美しい絵で、マンガ化されたブラッドベリの世界にひたりきることができる。

萩尾さんの絵は、しだいに何か、すきとおって、言うならば無機的な静けさ、といったものを湛えるようになってきた。それはあるいは、マンガ、という動的なもののためには少し考えてしまうことかもしれないが、しかし、その静けさと清澄さは、ブラッドベリのもっている寂しいたそがれの世界とほとんど同じ性質のものであり、たぶんその絵なしには、誰も『みずうみ』の、あの夏のさいごの悲しさや、『ロケット・マン』の透明な悲哀を再現することはできなかった。

考えてみると、私の好きな『ポーの一族』の『グレンスミスの日記』や『メリーベルと銀のバラ』、『シャーロック・ホームズの帽子』なども、ブラッドベリの世界と共通する、秋の寂しさ、たそがれの透明さをはじめから色濃く持っていたようだ。その意味では、この短編集は、モーさま故郷へ帰る、とでも言い得る、そんな企画だったのかもしれない。

ウは宇宙船のウ

集英社漫画文庫　0171-612030-3041

昭和53年12月31日　初版発行　★定価はカバーに表示してあります

著　者　レイ・ブラッドベリ
萩　尾　望　都

発行者　堀　内　末　男

発行所　株式会社　集　英　社

〒101　東京都千代田区一ツ橋2－5－10

電話　東京(03) 238-2781

印刷所　大日本印刷株式会社